

## 4月京都「都をどり」の見学

CA 田口 結城 山上 石黒 磯山 山崎

4月の学科のテーマは「都をどり」の見学です。

「都をどり」は、150年余にわたって京舞井上流の井上八千代家元の厳しい指導の下で稽古を積んだ芸妓舞妓たちが、優美かつ格調高い舞台を演じてきた京都の春の風物詩です。

場所は京都の花見小路沿いにある祇園甲部歌舞練場で行われます。

この建物は1913年に「都をどり」のために建てられた和風総檜造りの大劇場であり、国の登録有形文化財に指定されています。

最近隣に帝国ホテル京都がオープンし、益々注目されるようになりました。受講生はこの大劇場の前で集合し開場と同時に入場

したのですが、天気の良い悪しに拘わらず出席率は高く、受講生の期待の高さが窺い知れます。舞台は全八景で構成され、上演は約1時間、その間、一度も幕を下ろすことなく次々と場面が転換する「明転」の手法が採られています。

演題は「寛永行幸都華麗」（かんえいぎょうこうみやこのはなやぎ）であり、資料によれば、本年は後水尾天皇が二条城へ行幸された「寛永行幸」から四百年の年に当たり、本年の都をどりは、その行幸を記念するとともに、後水尾天皇ゆかりの「寛永文化」に思いをはせる構成になっているとのことでした。

ここでは全八景を一景ごとに解説することはせず、印象に残った場面だけを解説します。

第一景〔置歌〕では明治5年の初回から変わらないのが最初の「よーいやさあー」の掛け声。左右の両花道から各10人がそろいの浅葱色の衣装で登場し、銀襖を背景に一条乱れぬ総踊りを披露し、まず観客を引きつけます

第五景〔土蜘蛛頼光〕では一転して能「土蜘蛛」にちなんで怪しく勇壮な舞台となっていて、あてやかな女性が土蜘蛛に変身し、蜘蛛の糸を飛ばす様は見どころの一つです。

最後の第八景〔二条城桜吹雪〕では桜の名所を背景に全出演者が勢ぞろいし、圧巻のフィナーレで締めくくります。

あっという間に1時間が過ぎ、心地よい余韻のなか会場をあとにしました。

会場にはたくさんの外人の方もいて皆さん満足気な様子でした。

まだ行ったことのない方には是非観劇することをお勧めします。





祇園甲部歌舞練場・の前で  
背後は京都帝国ホテル



集合場所・待ちどうし！ネ



開演です！

